

茨城県・私立聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校

生徒が自ら発する「問い」を大切にし、探究し続ける姿勢を育む

文部科学省の「教育課程特例校」の指定を受け、8年前から女子教育プログラムを展開してきた聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校。そのプログラムの成果と課題を踏まえ、生徒に「探究の心」を育もうと、あらゆる教育活動の改革を進めている。「問い」と「協働性」の重要性を全教師で共有し、生徒が自由に問いや考えを発言できるよう、指導を工夫している。

「女性キャリア」の成果と課題を踏まえて改革を推進

茨城県南部の取手市に位置する聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校は、2010年度から、文部科学省の「教育課程特例校」の指定を受け、女子教育プログラム「女性キャリア」を推進している。それは、「女性として生き抜く力を身につける」をコンセプトに、中学1年次～高校3年次の週2時間、自己や社会への理解を深める探究学習、インタビューシップなどを行うプログラムだ。高校3年次には、それらの集大成として、生徒個々に自分で課題を設定して調査・考察を行い、A4判2枚程

度の「卒業レポート」にまとめる。湯澤義文副校長は、プログラム導入後の生徒や教師の変化をこう語る。

「『女性キャリア』での多様な体験を通して、自分の関心を深く追究したことがおそらく影響したのだと思います。理系学部を選ぶ生徒や、全国の国公立大学を志望する生徒が増え、進学先は一気に多様になりました。自分の関心を授業外でも探究する生徒が目立つようになり、元々、放課後などに個別指導を熱心に行う文化がありました。それが一層熱帯を帯びていきました」

そうした生徒の変容に応じて、授業でも探究的な学びを取り入れようという動きが現れ、同様の考えを持

つ教師たちが互いの実践を共有する輪が広がっていった。その一方で、学校運営として、大学入試改革や次期学習指導要領への対応が検討事項に挙がっていた。

そうした背景から、18年度、「探究」「グローバル」「協働」を「新取手聖徳STYLE」として掲げ、あらゆる教育活動において「探究の心」を育成する指導を、全校体制で推進していくこととなった。「自ら探究する生徒を育む」といった観点で、授業や定期考査、「女性キャリア」、学校行事、課外活動などの改革を進めている。その中心を担う教育開発部長の小林慎太郎先生はこう強調する。

「『女性キャリア』では成果も得ら

れましたが、動機づけがうまくできていなかったため、自分が設定した課題でも深められず、レポート提出が目的化していたところもありました。今の指導で生徒が真に探究する姿勢を本当に育めているのかという問題意識が、今回の改革の出発点にあります。どのような問いであっても、自分の内面から出てきた問いだからこそ、生徒は自ら追究し、そこでの学びや経験が生きた資質・能力になると、全教師で共有しています」

大切なのは、成果ではなく「プロセス」

改革の柱の1つは教科指導だ。す

茨城県・私立聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校

◎教育理念は、「思いやる力」「かなえる力」「助け合う力」。「和」の精神の下、マナーや所作を学ぶ礼法、日本の伝統文化への理解を深める書道の授業のほか、全校生徒・教師が一堂に会して昼食を摂る会食がある。

◎設立 1983（昭和58）年

◎形態 全日制／普通科・音楽科／女子

◎生徒数 1学年約100人

◎2018年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、北海道教育大、福島大、茨城大、東京藝術大に6人が合格。私立大は、獨協

医科大、慶應義塾大、上智大、津田塾大、東京女子大、日本女子大、法政大、早稲田大、関西大などに延べ106人が合格。

◎URL <https://www.seitoku.jp/tonde/>

同校の取り組みの様子を分ける動画や資料等を、HPで随時公開予定。下記の2次元QRコードを読み取ってアクセスしてください。



聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校副校長
湯澤義文 ゆざわ・よしひこ
 教職歴32年。同校に赴任して32年目（姉妹校勤務を含む）。

聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校
小林慎太郎 こばやし・しんたろう
 教職歴7年。同校に赴任して6年目。教育開発部長。

聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校
亀川かすみ かめがわ・かすみ
 教職歴5年。同校に赴任して5年目。進路指導部副部長。

聖徳大学附属取手聖徳女子中学校・高校
栗原太郎 りはら・たろう
 教職歴4年。同校に赴任して4年目。教育開発部副部長。

べての教科の授業で探究的な学びを行うこととしている。そこで重視するのは、「問い」と「協働性」だ。

「探究学習」というと、成果物を出すことに主眼が置かれがちですが、主体的に取り組んでいなくても質の高い成果物を出す生徒はいます。成果物は重要ですが、それが目標ではありません。自ら探究する姿勢を育むために、生徒が自ら問いを持ち、その解決に向けて必要となる他者との協働性を育むことを、最も大切にしています」（小林先生）

授業例を見ていく。進路指導部副部長の亀川かすみ先生は、担当する高校2年次の国語の授業で、『山月記』の本文を読んだ後、グループで疑問を出し合い、その中から1つを選んで話し合いを行った。疑問は「言葉の意味が分からない」といったレベルでもよいと、生徒に伝えた。

「例えば、『なぜ「虎」なのか』『袁慆は虎になった李徴をどう思っているのか』といった疑問が上がると、自分の考えを出し合って、物語を深く読み解いていきます。教科書を読めば分かることが疑問に挙がっても、教科書を再度読み、答えが書いていることに生徒が気がつけばよい

と考えています。どのようなレベルでも自分で問いを持って読み進めることが、深い思考、読み解きにつながるからです」

生徒自らが考えを深めていくためには、自由に発言できることが重要だと考え、高校1年次から協働学習の進め方を工夫する（写真1）。教育開発部副部長の栗原太郎先生は、担当する世界史の授業で、まず教科書を読み、その内容を自分の言葉で分かりやすく説明し合うペアワークを行う。そして、発言に慣れてきたら、4人グループの活動に移行する。

「最初から4人になると沈黙する生徒が出てくるため、ペアワークから始め、安心して発言できる場なのだ実感させます。そうした雰囲気

ができる小さな疑問でも率直に質問し、周りの生徒も真剣に答えるようになります」

授業と連動して定期考査も変えようと、思考力・判断力・表現力等を総合的に評価する問題を配点の3割程度含めることを全教科の目標にした。授業が探究的でも、テストが知識を問うものばかりであれば、生徒は知識をただ暗記すればよいと捉えてしまう。指導と評価の一体化は重要だと考えたからだ。

例えば、亀川先生は、前述の『山月記』を扱った考査で、「授業で生徒から出てきた問いの中から1つを選び、選んだ理由と自分の考えを述べよ」という記述式問題を出した。

「自分にとってその問いがどういった意味があるのかを考え、問いに価値づけをすれば、問いを出す時に、単に疑問を列挙するのではなく、自分に価値のある問いを出せるのではないかと考えました」（亀川先生）
 それらの問題の評価はルーブリックを作成して行うが、その際、探究学習の評価のために実施しているベネッセ「GPS Academic」(*)のルーブリックが参考になったという。

写真1 協働学習を進めやすいよう、空き教室の机や椅子の配置を変え、静電気で貼れるホワイトボードも用意。対話がしやすい教室にした。

*1 ベネッセの教材の1つ。問題発見・解決に必要な3つの思考力（批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力）を記述式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。

生徒同士のやり取りで 探究学習の課題を練り上げる

「問い」と「協働性」は、あらゆる教育活動で重視されている。

中高の入学時に行う「SFC（*2）」では、中高での学習方法の指導に加え、構成的グループエンカウンター（*3）などを行い、自分の考えをはっきり言うことが全員の成長につながるという協働学習の意識を持たせる。その後、授業や面談などでも教師が何を発言してもよいと繰り返し伝え、生徒の発言をしっかりと受け止めることで、生徒は次第に自由に発言するようになり、互いの発言を認め合うようになるという。

「女性キャリア」でも、各学年で学級のルールづくりなどを行い、協働性を高めていく。さらに、高校3年次で行う「テーマ別ゼミ」の前段として、高校2年次3学期に約10時間、各自が関心のある分野への考えを深める場を設けた。ここでは、心理、教育、理工など、関心がある分野が同じ生徒同士でグループとなり、例えば、その分野に関する疑問を、疑問に思う理由や疑問と社会との関係などとともに出し、それに対して

メンバーが質問や意見を出し合うといった活動を行った。

「それまで協働学習を繰り返してきた生徒たちですから、疑問や意見を出し合い、出された側もしっかり受け止め、『テーマ別ゼミ』での探究課題を何度も練り直していました。例えば、演劇教育から国際バカロレアにテーマを変えた生徒は、志望学部も変更していました。探究学習で

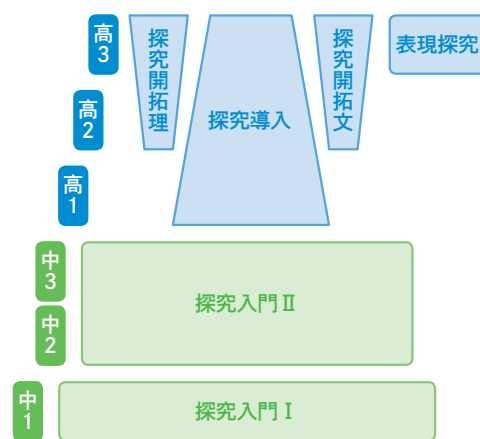
重視するのは、生徒自らが意欲的に取り組むことです。『なぜそれを選んだのか』『関連することには何があるか』など、省察につながるような声かけをしています」（栗原先生）

レポートの提出期限は高校3年次2学期半ばだが、途中で中間発表を行い、生徒同士で相互評価を行う。その意見を受けて調べ直したり、再考したりするため、レポート提出は例年12月になる生徒が多いという。

生徒たちの様子を見て、 柔軟に活動を変えていく

18年度から開講した「探究補講」は、自由参加の放課後講座（図）だ。

図 「探究補講」の講座



*学校資料を基に編集部で作成

各講座を複数の教師で担当し、講座の内容を参加者に応じて検討する。例えば、「探究導入」の1回目には高校1〜3年生の約20人が参加。アイズブレイクの段階で異学年同士でも協働学習ができると感じ、予定していた場づくりの活動をせず、「浦島太郎」のアナザーストーリーをつくる活動を行った。ライティング・ワークショップの導人として、生徒の自由な発想を引き出すのがねらいだ。

「毎回、担当教師で振り返りを行い、次回の活動計画を練っています。その計画も、生徒が意欲的に活動できるよう、講座中にも担当者で話して柔軟に変えています。協働しながら講座をつくり上げることは純粋に

楽しいですし、指導力を高める場にもなっています」（亀川先生）

教科を越えて実践や課題を 共有する教員研修に転換

教員研修も「問い」と「協働性」を重視した内容に転換した。例えば、アクティブ・ラーニングをテーマにした研修では、事前に悩みを調査し、同じような悩みを持つ教師同士を1つのグループにして、悩みや実践内容を出し合って解決策を議論し、それらをまとめて全体で共有した。

また、職員室に教師用の学び合いのスペースを設けた（写真2）。

「学び続ける生徒を育てようとするならば、教師自身も学び続ける存在でなければなりません。職員室で



写真2 数年前に職員室内に設けた生徒の学び合いのスペースは、連日、大勢の生徒が訪れて盛況だ。それを受けて、教師の学び合いのスペースも設けた。

*2 聖徳フレッシュメンズ・キャンプ。中学1年生と高校1年生が対象。

*3 生徒同士が自己を開示し合う活動を通して、互いを認め合う意識を育むカウンセリング手法。

私の探究学習

自分とは違う意見があるからこそ理解を深められて面白い

3年 豊島すみれさん

「女性キャリア」のテーマ別ゼミで、私がテーマに決めたのは古文の中で最も好きな『とりかへばや物語』です。ストーリーの軸であるトランスジェンダーについて、時代ごとの受け入れられ方の変化を研究したいと考えました。しかし、この物語の研究はほかの古典文学に比べて進んでいないため、文献が少なく、テーマが成り立たない可能性が出てきました。そうした時には、周りの友人からのアドバイスがとても参考になりました。

実は、中学校でも協働学習をしていましたが、周りとは違う意見を言うと反論されると思い、だんだん発言しなくなりました。でも、この学校ではどんな意見も尊重されます。1年生の頃は皆、どこまで言ってよいのか様子をうかがっていましたが、先生方が「思ったことを率直に発言していいんだよ」と言われるので、誰もが自分の思うことを発言するようになりました。私も自由に発言しますし、友だちから指摘をされても、その度に別の視点を得られるので、「意見が違うことが面白い」と思うようになりました。得た視点で再度読むと、新たな気づきがあり、物語の魅力さをさらに知ることができます。いろいろな解釈があり、答えが1つではないことを考えるのは面白いと感じています。

在学中に課題に取り組みきれなくても学校のために今、動きたい

3年 山口真央さん

高校1年生の時、文化祭の出し物が実現の可能性を十分検討しないまま賛成多数で決まりそうになり、多数決という方法に疑問を持ち始めました。中学校時代から裁判を題材にしたドラマが好きだったこともあり、政治哲学者のハンナ・アーレントを中心に民主主義や全体主義などの本や論文を読み、たどり着いたのが「公共性」です。先生と裁判員制度について話していく中で、私の関心の共通点は多様性の受容や情報の透明性などの「公共性」にあるのではないかと気づきました。最近では、公共性の観点から、刑事裁判傍聴プログラムについて、法務省の方に話を聞きに行きました。大学でも、公共性の実現に向け、関連分野を探究する予定です。

今の課題は、明和会（生徒会）会則の改正です。明和会副会長を務めていますが、現在の選挙では、唯一の判断材料である立会演説から約1時間で投票しなければならず、公共性に欠けると思いました。選挙の変更には、生徒総会で明和会会則改正の賛成を得なければなりません。私と同じように考える後輩と、来年の生徒総会で議案を出せるよう準備を進めています。私の在学中には実現しなくても、後輩たちのために今、行動しなければと思いますし、公共性にもつながることだと考えています。

教師同士で話し込むことも多くなったので、腰を据えて話し合えるスペースを設けました」（栗原先生）

探究学習を支えるツールとしてICTを有効活用

指導改革の成果は生徒の姿に表れている。授業後も話し合いを続ける生徒たちの姿は日常的に見られるようになり、授業に関係なくテーマを

決め、論文や書籍を読んだり、関係者に話を聞きに行ったりして、自分で探究を深める生徒もいる。学びの目的をつかんだ生徒は、学力が加速度的に向上すると、小林先生は言う。「私たちが思い描くのは、入学時から正比例で学力が上がるのではなく、自分でドライブをかけてグッと伸びていく生徒です。問いや協働性を重視すると授業進度が遅くなる場合もありますが、後で生徒たち自身

がばん回していきます」
 今後は、生徒が成長を実感し、教師が指導に生かせるよう、探究学習におけるICTの活用を進める。「ICTは探究学習を支える有効なツールだと考え、授業後も議論できるチャットや学習成果を蓄積するeポートフォリオなどの環境を整備しました。また、HP上で、生徒の様々な取り組みも発信していきたいと考えています」（小林先生）

同校では、生徒の9割が推薦・AO入試を受験する。探究学習を教育活動の軸とし、希望進路の実現に結びつけたいという思いが強くなる。「18年度の入学生から、選択科目を増やし、各自の関心に応じて学びを進められるカリキュラムに改訂しました。卒業後も自分で目標や課題を決めて学びを進めていく、そうした探究の心を育てていきます」（湯澤副校長）